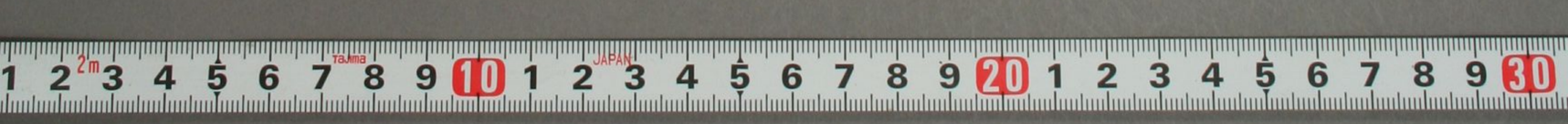
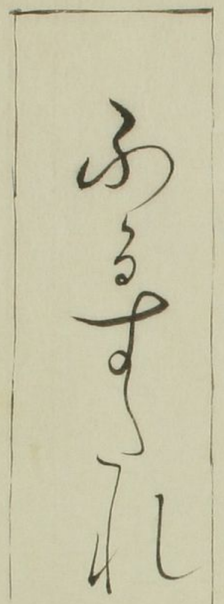
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black

中村俊定文庫
文庫18
271


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30



自序

器を負
み負ひ
めるとい
へつゐ
きこし
風やふ

一瓢を
ひさ
いのちを
この
のいの
のる
をきを
風雅坊と
毎
ゐて
ふうをも
のく
をまも
栄厚の境

を以
記とす
感し
生涯を
しとす
芭蕉の
ときもひ

あり
のをす
四時を
習ひ
ありて
中を
風の
師と
雅し
情刻
ぬ
なりや
雅波乃
床

蕉門の俳をうしなひよを
木曽塚の翁仲年ごろ葬法
祝をいとなめ一株の芭蕉の
その名の俤をおもひなこのう
ちを杉苔むすまでうつ
をおもふをうち

素鄙合一ならむことを二ごろ
のほどより
茶話ふ禅を修し三斜の
飯菜をわかつものく
一口百銭の一巻を綴
五七年前の一巻を
志をおもひ我又古廟の

寛保第三載癸亥初冬

深甯窗湖十

一瓜歌終庵のあるじ般息の
為と平為の日百日一遍乃 舎
を修し一洲時を修表し事
名号の偈句を要とあつめ
法事前を持三礼の義を組よ
共為のいとまを乞ふ

寺務院
法を次ひ一字ふ唐仏
青磁乃鉢世音菩薩を安
置して旦暮ふ拝し堂の
床静やすく学ぶ勤のいとまふ
室の主称くことのこゝろを感ず

当年の二月下旬の紅
を吟じて南紀ノハンスウインフウサ南紀ヲミタウフくく

虫二菴秋風

叙

枯野を廻る夏幻も傷馳
濃歩川
五十年の歳月をむかふる
翁の御精神
世平流れ
口ちゃ絶ふ氏風を

あうむる人こと多のまゝ
昔子午嵐肝胆聚當行う
老父琴忘あまり琴曲乙弦
たとへてむかしを古をしたひむうを
今のねこそおてまをふぬ
こ化著の余芳をむをりをの

浦島のうの紀端午
ホ数月忘れ灯下の

序

吹そろねこの
死てこそ
芝門先輩宮もるの不苦を志を
ひ向ふを仰ぎ迎梅乃
雅道をまもり汁碑前捻香
の便り陣ふ今の人格ろ

叙

芭蕉真雪にて新年と云へ春
詩を吾と待里一年毎ごと久
覚へしこの句を抱き老人
とこ年五十年好真秋を酒天
氏神毎月その忘れむこのの
真清久乱と毎新年祈候きす

風騒そんなあるその基礎を
慕そうとするまでもない
真徳を長くほろぼしへむ
おもふらくは一と頁葉更史
用くも過褒をいとなく自他
特雅実ふ云しかくれの

一書を拝読して一句をたてまつる
赤紫烟遠の恋をの一里塚
小序俤古今同一の徳
化をあふぐ時

窓山中石腸

簾說

貞享の頃のそよ遊行上人賦國法橋
昌純そ（）処者れの至一座連歌
興の砌俳諧の一巻なる事て
桃青乃判をうけ侍る事ありて巻の
中ふ簾といふ字を笠と書き
結ひ改めや天台托芽菩薩ヨヨ緑覚
年羽ひそ書損せ表脱字もちろん
笠芦ふ字形似よりあやまる
かくるあれ上人
箱芦と添出あるを

もの名をおよそてかきそなれ
京乃そ（）ふ（）ふ（）のあるを
とふ（）ひやら秩（）
のへ（）し（）
なを出（）のさ統をちら竹かふて
ま（）ま（）く（）とのけ（）こそ尺し
なと（）ふ（）ふ（）百を連詰お交を其業
ひとつ（）ふ（）ふ（）三十一字
ふのをもて贈答せ（）ふ（）と文俗へ
そ（）へるみ学ふよそむう（）ハたのも
あるは挑（）きまゝのと生拠のある
神そそそをみ（）香惚峰の雪と

祭奥

口ずさびまひしま笹を提
多年てを利やまとを行こ
笹のてよ之年ありきく数こ伝
お月つめきく里充合次るまた
出事を出のはめよるる
ちのな利

初雪や外閑流くる古笹　湖十
流水を汲むまろ口切のる水翳
赤鶴つ李な文ものとんるて　信鳥
田李草鞋乃履史廣の弥　文十
多を出て傍のかまゝぬ九合羽　笠澤
湯氣煙こと焚ろす版　雲帳
訪る月無なのまくえ　社鼠
友艸交せくふをさくし　起月

生衾隈代君綿の羽織着て　大湖萍
都古い先へ弧るよう原　封示
多勢なみつお三十の坂を越　全枝
梯敢へう侍る猿へ羊羹　恵風
奢者とも堂付の志ま太る炯幸入　鳥谷
石灰　書もむ　亭の　電　文石
五十雀多の小ぶそ雷住ま）　秋風
俗雑い費ル寺の名月　亀及

献立すむつのよものふまの形　汶泉
軍者の泥鰌乃四角三角　如貫
古名を詠て跳らるたるの京　桂十
江戸のよいとるよい名菓もち　六歌
当戸へ出て宮紀陣の花菖　仲虎
よを紀の君も併せ乃中　左龍
池上と五百雑漢八寿の松　前路
鞭を貸てる念者といたる　鷺舟

付をたてさせも　右く　和豊
おもい逃て　音茶を　鳩居
さきたまよ　垂古流す　ら力町　紀逸
紫籠より出て　梅のくれ　左英
杉もと入る山乃おくまで山　刀　坡及
淀屋の甲よ　詰を　重牛　魯兆
雑式の有剃　てみる　春許　紫翁
瓦灯口すゝ　粘仮板出　湖常

仇人の留守の閑　湖雁
ひその年量を　多る　囲　原富
うつ里も柱男　をもの　泗浪
椒手紙等　うーや沢栗　南屏
梅杭の字の　るくなる　か　蓮　長庚
日の入早　日ヶ寝の　尾　圃月
天王乃札をまき　つ　風　規十
つゐをすゝ　かへす山伏　全鳥

なの富士三井の鄽の庵る陵　錦花
妾乃畑先へ立ける　全鏡
新茶庵花の吉小弥を引　城鳥
白粥さます宵のそと　玉馬
煤竹へ入手る向ふ竹筆　石腸
額をぬの田をちつほま　朝山
挨を吐風ふ小豆の跡を追　芦蝶
襖へ立てり秋の宿今　祢朔

三人乎三筆を發句の前　栄十
夕日の赤手ごまと稔ゝ　千色
三
鍋乃尾笠代を成て夜を　棘菴
舟の亭主小廣袖て　河笠翁
出合はを塔を乞上る出立　栄貞國
茶筌あむもの冷るを夜　来示
草津より守山の人をのまち　祇丞
馬の毛並乱ぬなり　湖刻

未枯を眉ま　　知圭
訪ひて窓こ　　晩雨
ゐ歩行の　　守静
法嶽特色の　　泰洲
焚くたしのふつく　　亀毛
新米うれく肩へこぶ　　金弊
色地を着る嫁の　　友以
おしなある電お　　孤星

三月
三日の日や干上る苺を養ふまるのすゐ　　知圭
二夜めの陰干仲履ちよせ　　蝸名
貧乏乳丈へ付まおむつ産　　紀声
朝のうら転寄てなし　　亀文
ゆく多や暁去の上れ古暦　　挙遠
物一切そのかゆ原木を買一羅
引袖かよしうせてう雛　　湖珊
松枝を一本そ遊し　　水語

大工造ひの　可主
ふかい峯のもみぢ　亀音
燈籠秋珠を　呉在
夜もすがら　其川
よやよりそふ　和雪
朧おかしの　田社
捧を物ぞ　盛府

杜の松のこを　登魚
卧牀乃床小秋の　平砂
陣中の屋小情あ　櫻川
約ふかんよ小ぬ　栢莚
雪雪をみるきの　四乳
一代北斎　木富
不二都を　湖堂
まる笠の　三夕

升拔(ふ)ての和(ふ)へ三(さ)の付(つ)す　陽十
老(ふ)会(ふ)佛(ふ)の毎(ふ)度出(ふ)智(ふ)　魚川
あ(ふ)れ廿(ふ)ふ(ふ)ふ(ふ)ふ

廿掛うのお〳〵三のかす　陽十
岑高佛の毎夜出羽里　魚川
あまの衣芒ある花なき　素嵐
時雨をくゝる　榛露集
夕般の約束ま引故一
痲氣乃茶百掛うす　有佐
梅ま芒ほ彩の悟きハ東讓亭十
その襖をつされぬ　沢柳延

秋冬帆のおしるかハ二三日　放牛
茨笠干萩の移る辛崎　如陽
芭蕉翁桃青居士の花筐　見龍
囲くゝ年ろのかけろふ　百巷

右一人一句乃百韻を老少收ひ
雪月花の席ねるの午陽午
蕉翁の祭ふのまま

祭祀

翁去る五十年流れ来りて此あるを以て
他のものすらこれを仰ぎ
其恩を報ぜんとするの
ものすらこれを
の的となりて鬼拉大会の一夕を
重ねんとす

翁亦自ら
[illegible]
祝あり

芭蕉忌や元まとを　信鳥

[illegible]
[illegible]
[illegible]

団をやいろいろのこと物ごとの留まれ
からはなの里雪まろまれ
高年佐々
きつ雪をきることをとゝのへ平谷 艸 封示

笠塚の下や炭売の声も松ろまれ 和一 大湖萍
炭売の声も松ろまれ山家集 全枝
初霜や花のゆめなる音 艸 泗浪

同

冬松や手折ハ朽す業 烟 文十

雨ふる此人よりそつゝ礼 恵風
きものを恵やかけのてまる会佛藩 鳥谷
冬ごもり貫線の者を賞やる 千色
蕉翁之師の達磨を
雪ぜんざいのミりわり松本 起月

同

蕉翁く大なる水蕉翁徳華
曳まるまるわれ造きねの一句を
失しなき俳千ごまの
俳諧きく変をかれ昨の一枠

孫まで五代を一つ屋根の下に
今もなほ細かを書とる杜甫が牛　笠澤
四十九の上髭そそる法の鏡　湖雁
五十年仰ぎ来しかの月坡及
爰といひ五十ぐみのその一つ花　南屏
風を娘を枯てや庵をちる　湖常

同

老ぬよと杖やらう雪の暮　雲帳

木ぐらしの庵の体や頭巾袋　孤星
芭蕉忌やおもひ出さるふ卅の笠　長庚
故人のうた仏雅の柱聯と
生活ぎぬこころ等の世の有
いさぎよさも雪見ふ和まくく
と世の人を酒の流れをくの女を

同

その狭るむ一つの雪を詠る　放牛
邯鄲の夢や柏酔の五十年　文石

五十も残栗津の茶や渓千句　亀及
茶の花や言も句もなき五十年　桂十
郡鄂の杭乃至や小夜時雨　六歌
猿蓑やの字に行ける初雨　鷺舟

同

古塚乃志を知れ筈ん秋の浪　汶泉

この柴や古へかつを茶　前路
廂僧のうをを里むの一や大根馬　州帛
萩薄乃すゝきを招くれの　左竜
茶の花乃羽織ゆるす朴　左英
鳩居

同

五十年ゆめのはるやひの木笠　魯兆
風や木賃の名を毎る　原富

枝川の流れを汲む梅花を
芭蕉忌のその日に
達広と維広の吹く笛に　湖刻

同

蕉翁忌まのあたりてなほ平生の
いでたちをいふ　湖珊
探てと走忌のまゐりかな
正雅の光を放つ雪の夜　栄翁

翁忙を枳八枝ぬ多加の雨　見龍

以下之佳句以到来之先後
寫之

如在

初雪乃ちら〳〵ふりぬみなの
先きのむ推乃木を有なる木を　鳳毛
文しら行雲記のかゝひもて
右久ゝ二ゝ年四忌の後
ゐあめふるそ冥加ありて人芳
その椎を今を拾ふや冬木立　玉栄

祭時

さゝ枝忌や俗すてゝ法の如法の場　晩里
　晋子の墓参
誹諧の翁きませる枯尾花　茅山
　翁八景風光をめでゝ帰庵を迫しめ春興を
　誘ふ為ほ世そや諸流
　泊の仰さらまほしき句を乞ふ
　――終心ある
黄金の諾又時有五十雨　佳凰

又ぬ人乃魚をうえ玉ふ秋の乳　立兒
そめるまゝその一句を時雨かな　礎月

敬禮

をく霜や墓の苔乃照　我常
その枯野夏もゆめや五十年　笠翁
栗飯やまゝ子うまを一時雨　棘巷
おもけなる抱ちゃの酢や囲月
おもふるの栗屋乃枯まで　規十

年の花や今も五年尾谷
塚もろ〳〵誰の後暁雨
法莒の洞を彩る
そも〳〵至や杉のふるひ合歓 峯遠
爺のをしへ四五年
かくる時
不可思議の流れ多田有佐
みちもよし石の並乃少し 木富

雪年雪ふる
五十年杉の古ひや水
古池のきハすゝ冬菜畑 和專
そらほしもすゝ
千葩汁も 佛 柴十
おもかげや四雪灯籠 其川
沈沈雀
ふせそかる
ちく〳〵と火のみかなや 紀声

この坂乃くまの詩や　夏　永　泰洲
三きてもゆるまや芭蕉の日　金幣
初雪る匂ひなき旅の衣　羊素
先のなき草の走りを枯野かな　石腸
拾めよる拾月の遥し紙衣哉　湖青
　蕉翁の当像を拝て
痩て犯そもよ梅の匂ひ哉　玉馬
枯冬のほうまうき尾もが　平砂

芋の坂乃家ありかうせんとて
さゝげのかつらをくばらんとて
そらまめをあきてまつ此
翁を

玄冬（仮）
玄冬めかもかも納豆汁　栢莚

掛物のすゝを古き郎中哉　翠扇

蕉翁の像を尊き太白老仕の
体を学ひ和歌に釈迦の教の格
平故おとしいまと此史泥洹を期
とてそ文そ
る五年
せゝゝ
風や吟まるとき泥洹師　百洲

十月を花の後るや十二日　可圭

殊かなるかなと云ひ

百姓をそそなつの一簑の雪　一羅

桃青を人五十年の杜世のむ
かしのやうをしたひて
一をとをもとめやすく
のふこのきはをおもふ
なくおもふ
ふを心操を
うを時の人物

芭蕉翁
ふの文
あるく
染よば
しばは
まを
きく
牧母
俊朴
門徒
つま
て
かさ
うと
百菴

栗陵を向かひて

辛崎の松をへだてて　舊室
耳平入そふ花をへだてて　水語
急ぐ人を添へ　杜尾亮
放生の時　その蜀　常仙
月花や　その時　雨の杉木立　亀毛
杖の泊　する家根の　来示
すすき　狐の時　を

又侍の　祇丞
きを我忘や　華端
十月や　湖橋
風の淡ひ　古簫
山雀や　芳水
十ろや　元亮
はせを忘や　祖師の忘日乃多い　故一

山雲ゐ
いときり

玉味噌をつく夜めさして時雨哉　米仲

うるくとめくるや雲の杉木立　再賀

大徳の百をいかさで千鳥哉　湖南

風や草乃林を分る塚　湖石

をを取てなをもとめたる雪の夜　吐十

乃一川枯野の夏乃日暮し　乾什

義仲もの具足をぬや初しぐれ　盛府

拙尓庵を芭蕉をいとふ雪折尓　陽十

三十年ぬくとめてくれし人をなを世を後し　魚貫

枯枝のその実乃ものあや初時雨　朝山

転却くたびはもをも我乃忘　芦艸

ゆくてまで橙や少き月　衍朔

蒟蒻をきるまかるを時雨哉　登魚

御川の雪をはるゝや墓　四乳

尻をそろゆうをもたれ尓　三夕

子鷹

永寿や尽る受ゐも登座
年経ぬや高い木ほひの名も旧 呉在
春更る三味線ひきの笠 貞屋
初時雨さめて有明向やひのき笠 露集
芭蕉忌やすゝちやふ人たのまれ 十町
世下るかくねんぶつと我仲事
於て先師ぬれ給ふ
五十年今ハ受てや雪 佛吏登
ひいふうさいよ

七草寺一泊ふたゝび

芭蕉忌や時雨て通る猿子橋 莎青
十月乃尾もとゑ一落の汐 澄江
新嵯峨や松千歳も経て五年 亭十
翁ゝひあと我見ん春来ん 尹保
墓ゝ守家や彩色よう〳〵 秋風
ゝも忘や栗焼ゝ傍を痛せ 友以
翁のや団雅つゝまぬ也 貞山

冬籠り永き命を一年に　貞國
供華の匂ひ枯枝をかすめまゐる　渭北
初雪やそもその夜を五十年　何江
咲しとよせてそくその夜半の　拾翠
みの丸を抜手をやめ抜ず　貫十
そそくまゝかしこりんは豚汁　存義
花もの泊をまふやその夜　雀童
枯ぬ名の枯野をまゐる　尾笠
尾笠が　少長

木乃葉ふも影ふ松ぬ茶の翠織　紀逸
を笹の枝をなる茶ま時多弐　亀文
ぬまるま人やむをしの枯尾笠　素嵐
まるの立ふ湖まし九ぬ　湖堂
祖の枝をいやや笑ん神堂月　晋阿
六月といふ野やあり嵐山　田社
幻の附ろをふる少ぬか　亀音
芭蕉をやさみなるぬふまて　立九

秋郭の翁をもちをみ地　露月
云出すを　長雪庵の宮かれ　花礫
翁の御ふ凡そ世をつゝぬる作
かきるの誰のあるん
五十年ぶりの枯野をかこち山
櫓とハ出るゝ墓の秋る木十
文よりそんとあわ
翁の吟をおもひ
訪ひてゆめぬ柱あるみるもの　蝸名
翁深川の捨ずから章の袋や
投ひやとあるをそ

おもひよそそ向
ふるも又雪の袋の法事米　長梢
るつのやは枯野の翁を五十る　青郁
栗飯の木曽路をゆめの枯野行　青峨
祖翁の懐古を
望や霜や冬良季焚くる雪も夢　樓川
をせ秋忘やあのくとロハつきけくを　亀成
其句をやてを他者を陪ふ
法の手向とをす

袖志る五十展轉して 萬英

暁所と加賀や芭蕉ふる
と他し へ元禄の昔せ永生國
て翁の門人の下にてをひ
他ふそ一へ世のをきをきをはふ
と葉宮を教ひてかへるものや
作芸多き枝垂の中乃石佛 手洲

世み逝く枝垂なく佛をみるなく 魚川
湖の神名佛ありて雪をみ 湖燕
五十年笠平かふりて雪をみ
其葉の宮を味へぬを芝の宮よ
を作うきふんやあり茶三石の志を

てをみる一滴乃
猿蓑をもつぬ人さく時雨るなり 凪和
翁塚閑田をうつ稗の拾所 渓梁
我袖を笠平短なりける 男車
うつ猿の村をもちぬ木の梢 可来
其人の夢をふるふん柘野原 貞橘
袖垣平なりて歌や炭俵 柳延
ふることの今も。ぬ句塚 中和

祭場

蕉翁〳〵行歴生涯五十余
まふこそ芭蕉の杖一ふし笠　浪花　芳室
遠忘〳〵諸門人の追悼ふるに
ゝ句有　吉翁の恵なるべし
はせをおくふ
幾時雨めくまもや人の袖日記、了雨
時雨〳〵何と寐てより淀の舟、鼠角
舩み帆手なき雲を秋や神無月　十雨

草紙疵拭ぬはなし孤山松、梅室
蕉史のむ〳〵の吟よまそそを吊
諸国を神童学を技芸の光乱、烟足
を学翁は死て辛夕曽孔子
雪の日やとてもこふ不まめ、樊川
幾一れことの葉妙玄実を述ん、隆苗
今もや生ぬ生せ翁のゆ句ろ　伊丹　蜂房

芭蕉翁没てより五十ゝまきそみを
賣て諸国を行脚の輩数ゝす
なり蓬門の利益他年
ことなり
影ゝ
その
ことのそれ
ホトゝギス 掩 浪を 布門

楮尾

春雪乃ゝの宝や筆を竝 木髪

序

右等の
ほいて世
をまく
那
苔を

寛保三癸亥歳冬十月

東都

日本橋南三町目
吉田魚川　彫工

本町三丁目
西村源六　蔵版